

“但馬牛”今昔物語

兵庫県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」

館長 渡邊 大直

第 23 回「肉用牛としての但馬牛改良の足跡」(4)

1998 年から 99 年にかけて行われた県下の議論を基に、その後の方向性を示す「兵庫県肉用牛振興ビジョン」がつけられました。

因みにこのタイトルが「但馬牛振興ビジョン」でなく、「肉用牛振興ビジョン」なのは、初めに但馬牛ありきではなく、^す素から議論したいという意味です。そしてこの議論を経て、“但馬牛の閉鎖育種”を続けることになりました。

兵庫県の子牛市場は但馬牛に特化した特異な市場形成がなされていること。そして県外の種雄牛を利用すると、販売用に限定したとしても、その血統を受け継ぐ繁殖雌牛が残る可能性があり、一旦他県の血統が混ざるとその除去が極めて難しいというのがその理由です。

その上で、具体的な対応策について議論が進み、但馬牛の経済的能力の向上と遺伝的多様性の確保という改良対策が議論の中心となりました。

農家をはじめ関係者は、こうした事態に至った経緯が判っていました。そのため、但馬牛が肉用種という現役の家畜である以上、歴史と伝統だけでは存続できず、時代のニーズに適応した高い経済的能力がなければ生き残れないことが強く認識されており、但馬牛の経済的能力の改良に育種価を使うことになりました。

兵庫県では 1992 年から育種価分析を始めましたが、コンピュータからはじき出される得体の知れない数値を信用する人は少なく、改良の現場で殆ど利用されていませんでした。しかし農家や家畜商、現場技術者がこの種の情報に無関心だったわけではありません。肥育農家は素牛の情報や枝肉成績を書き留めていたし、繁殖農家も肥育農家や共励会等から血統や枝肉成績といった情報を集めていました。

1994 年にオープンした北部農業技術センター（以下「北部農技」）では、育種価を活用し、当時希少系統になっていた城崎系と熊波系種雄牛の造成を最重点課題として取り組んでいました。ちょうどこの議論が行われていた頃、第 1 期生の「菊原波」、第 2 期生の「北宮波」、「照明土井」が現場後代検定に入っていて、育種価に対する期待も高まりつつありました。

種雄牛の育種価を公表し始めた頃、肉質、肉量ともに優れた質量兼備の種雄牛に注目が集まりました。しかしこの議論を進めるうちに、繁殖雌牛個々の能力に応じた改良を行うのに、肉量改良のスペシャリスト、脂肪交雑改良のスペシャリストといった種雄牛も着目されるようになり、育種価で個々の牛の特徴が判ることも理解されるようになりました。

種雄牛の後代検定も現場後代検定に替わって、育種価で能力評価を示すことができるようになっていたことも後押ししたのかも知れません。

その後、育種価で評価される形質は枝肉 6 形質だけでなく、種牛性や不飽和脂肪酸なども加わって多様な能力を評価できるようになり、経済的能力の高い種雄牛ができ、世代交代も順調に進むようになりました。

しかし、遺伝的多様性の確保の方は少々厄介でした。

但馬牛の家系は、中土井系、熊波系、城一系といった種雄牛父系が一般的で、県の改良方針も種雄牛父系で示されていました。

1970 年代後半以降、但馬牛が肉専用種となり、凍結精液による人工授精が普及すると、中土井系の特定の種雄牛に交配が集中し、熊波系や城崎系統は急速に衰退しました。

このため県は 1988 年に、純粋な系統を維持してそれぞれの形質を固定するとともに、系統間交配によって経済性の高い実用牛を作るとする方針を打ち出しました。そして北部農技に、希少となった熊波系と城崎系を維持するための牛群 80 頭と、中土井系、熊波系、城崎系の系統間交配でつくるモダン但馬造成牛群 120 頭を整備しました。

しかし現実はいまだそれほど単純ではありませんでした。但馬牛は皆“モダン但馬”になっていたのです。